

# 清末 III

—清末遺跡群第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第508集

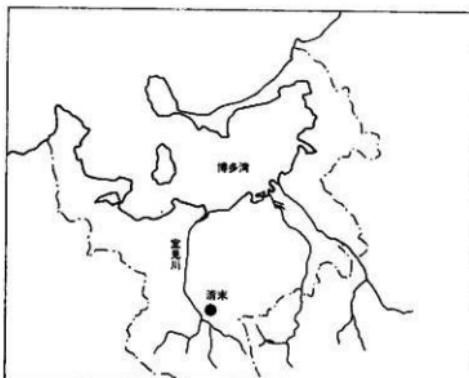
1997

福岡市教育委員会

上 十九  
清 末 III

—清末遺跡群第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第508集



遺跡番号 KYS-4  
調査番号 9459

1997

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し未来へ伝えていくのは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街化の拡大はこの地域にも及ぶようになり、その結果その一部が失われつつあるのもまた事実です。福岡市教育委員会は開発とともにあってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存につとめています。本書は下水道工事に伴う早良区清末遺跡の発掘調査の成果について報告するものです。この調査地点の周辺は平成2年の國場整備に伴う発掘調査によって、古代から中世の官衙的遺構や居館が検出されるなど重要な遺跡のひとつです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

1997年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田英俊

## 例　　言

- 本報告書は早良区東入部・西入部地内の西田隈第9雨水幹線築造工事に伴って1995年2月9日から4月3日にかけて調査を行った清末遺跡群第4次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構実測の作成は屋山・辻節子・山田ヤス子が、写真撮影・遺物実測は屋山がおこなった。
- 製図は鶴早津紀・屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
- 遺構・遺物番号は通し番号とした。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

### 清末遺跡第4次調査

遺跡調査番号	9459	遺跡略号	KYS-4	分布地図番号	94-A-21
調査地地番	早良区東入部・西入部地内				
開発面積	2100m <sup>2</sup>	調査面積	672m <sup>2</sup>	調査原因	下水道整備
調査期間	950209~950403	担当者	屋山　洋		

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 立地と環境	1
II. 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 縄文時代の遺構と遺物	4
3. 弥生時代の遺構と遺物	4
4. 古墳時代の遺構と遺物	4
5. 古代～中世の遺構と遺物	6
(1)土 壤	6
(2)井 戸	17
(3)溝	17
6. 時期不明の遺構と遺物	23
7. その他の遺物	23
8. 小 紹	24

## 挿図目次

第1図 早良平野南部の遺跡 (1/8000)	2
第2図 調査区位置図 (1/1000)	3
第3図 古墳時代の遺構と遺物 (1/60・1/4)	5
第4図 中世土壤実測図(1) (1/40)	7
第5図 中世土壤実測図(2) (1/40)	9
第6図 中世土壤実測図(3) (1/40)	12
第7図 中世土壤実測図(4) (1/40)	13
第8図 中世土壤出土遺物実測図(1) (1/3)	14
第9図 中世土壤出土遺物実測図(2) (1/3)	15
第10図 中世土壤出土遺物実測図(3) (1/3)	16
第11図 中世溝遺構図 (1/40)	18
第12図 中世溝出土遺物実測図(1) (1/3)	19
第13図 中世溝出土遺物実測図(2) (1/3)	20
第14図 中世溝出土遺物実測図(3) (1/3)	21
第15図 その他の遺物 (1/3・1/1)	23
第16図 環壕全体図 (縮尺 1 : 1000)	24
付 図 調査区全体図 (1/200)	

## 図版目次

- |                      |                  |                       |
|----------------------|------------------|-----------------------|
| 図版1 (1)II区全景(西から)    | (2)I・III区全景(東から) | (3)III区全景(西から)        |
| 図版2 (1)IV-1区全景(東から)  | (2)IV-1区全景(西から)  | (3)IV-2・3区全景(東から)     |
| 図版3 (1)S K005(北から)   | (2)S K007(北から)   | (3)S K010(北から)        |
| 図版4 (1)S K014(北から)   | (2)S K014完掘(北から) | (3)S K015(北から)        |
| 図版5 (1)S K018(北から)   | (2)S K019(北から)   | (3)S K021(南から)        |
| 図版6 (1)S K025(北から)   | (2)S K026(北から)   | (3)S K034(北東から)       |
| 図版7 (1)S K041土層(東から) | (2)S K041(出土漆製品) | (3)S K046(北から)        |
| 図版8 (1)S E045(北から)   | (2)S D008土層(西から) | (3)S D008・S D009(東から) |
| 図版9 (1)S D016(北から)   | (2)S D028(東から)   | (3)S D043(北から)        |
| 図版10 (1)S D037(北から)  | (2)S D046(北から)   | (3)S D055(北から)        |

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経過

1994年7月15日に下水道局建設部西部建設第1課から教育委員会埋蔵文化財課に早良区東入部・西入部の下水道工事に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼が提出された。申請地の北側部分は1990年の入部地区圃場整備に伴う清末2次調査において古代～中世の官衙の大型掘立柱建物や中世の居館跡など重要な遺構が確認されており、その後の3次調査において本調査地点まで遺構が延びることが確認されていたので、東側の試掘調査を7月19日に行い、8月21日に調査が必要である旨を回答した。その後1995年2月9日から4月3日まで下水道埋設の掘削部分の本調査を行った。

清末遺跡はこれまで4次の発掘調査が行われている。そのうち2次調査は「入部III」(福岡市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第310集 1992)。3次調査は「入部V」(福岡市教育委員会 埋蔵文化財調査報告第424集 1995)に報告されているため、本報告書は「清末III」とした。

### 2. 調査の組織

調査委託：下水道局建設部西部建設第1課

調査主体：埋蔵文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学(前) 荒巻輝勝(現)

埋蔵文化財課第1係長 横山邦継

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 内野保基

調査担当：埋蔵文化財課第1係 星山洋

作業員：青木秀夫 阿比留治 池健介 伊藤ミドリ 稲富良子 井上ムツ子 岩見敏子 牛尾秋子  
牛尾二三子 岡部喜久美 川島ツキエ 江節子 鶴田喜美江 鶴田祐子 緒方シマヨ  
金子ヨシ子 惣慶トミ子 西島彰子 平川英子 平川富美子 平川伸子 平川史子  
山尾タマエ 山口タツエ 山田ヤス子 吉岡勝野 和田裕見子 山西人美

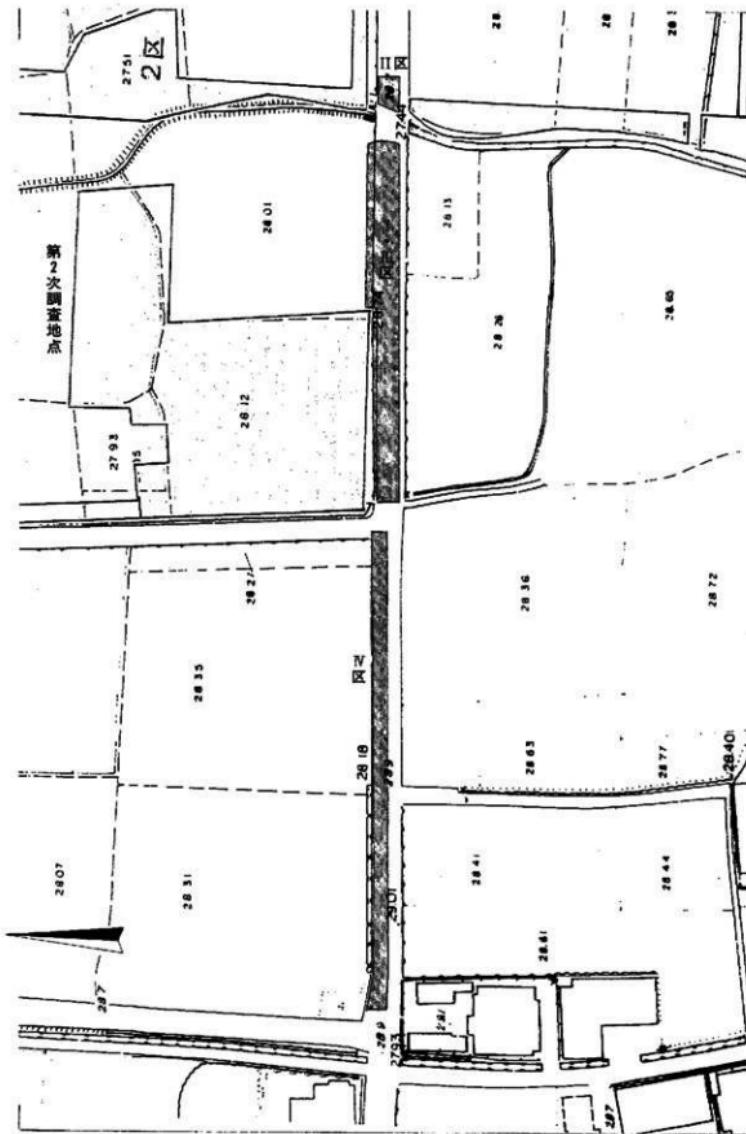
整理作業：神谷玲子 黒早津紀 渡野年代 山口初子

### 3. 遺跡の立地と環境

清末遺跡は早良平野中央南寄りの、宗見川右岸の貞島川などが形成する沖積台地上に位置する。北側は1990年に調査された清末遺跡群第2次調査、南側は1991年に調査の3次調査に接している。調査区の西側部分では宗見川の氾濫による疊層が広がり、その上の黄褐色砂質土層に縄文時代後期～中世の遺構が埋め込まれていた。疊層は厚さ2m以上あったがその上層部分には縄文時代後期の土器が含まれており、その中には磨滅していない土器も多く含まれていた。南側で縄文後期の遺構が調査されているので疊層上の黄褐色砂質土が形成されたのは縄文時代後期以前であることは判明しているが、周囲の調査によると、その後も頻繁に河川の氾濫が起きており、弥生時代や古墳時代中期～11世紀末までの遺構が希薄なのは洪水や土石流などの氾濫による不安定さが開発を中止させたと考えられている。その後、11世紀から12世紀の官衙の大型掘立柱建物にみられるような大きな力を持った勢力によって条里制に沿った溝を掘削するなどの開発が進むまでは荒れた土地であったと思われる。



第1図 早良平野南部の遺跡 (1/8000)



第2図 調査区位置図(1/1000)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

本調査区は下水道の掘削に伴う調査である。下水道により掘削される部分は東西350mにわたるが、東側の真島川に向かって標高は低くなり、東側の遺構検出面の土は暗茶褐色の粘質土となる。12世紀まで湿地帯の様な地勢であったと思われる。1990年の入部圃場整備の試掘調査では遺構を確認することができなかつたので、今回は調査区対象地から外し、西側のみの180mのみの調査となつた。調査地點は現状の道路部分だけではなく、それに沿つた水田部分も深さ4mちかく掘削して下水管を入れることになつたが、清末2次調査において水田耕作土の直下で遺構が確認されていたので、道路と水田部分の両方の調査を行つた。道路と水田の間には道路の擁壁があつたが、除去すると下の遺構面を壊すおそれがあつたため、擁壁はそのままで先に水田部分の調査を終わらせ、その後道路部分の調査を行うこととした。調査区は東西に長いつが、生活道路などによって6カ所に分断されている。調査ではそれをIV区に分け、下水道工事の予定に従つて、調査は東側から行つた。水田部分西側の調査では2次調査で掘り下げた遺構を確認した。

### 2. 繩文時代の遺構と遺物

調査区内で遺構は確認できなかつたが、礫層や遺構覆土中から縄文時代後晩期の土器と黒耀石の剣片が多数出土した。南側の3次調査において後期の埋甕が2基と晩期の包含層が出土しており、縄文後期には黄褐色砂質土の遺構検出面は形成されていたのが判る。後期の終わりから晩期前半は遺構は検出できなかつたものの、包含層などから多くの土器が出土している。晩期後半の遺物は出土していないが、1993年度の入部の圃場整備に伴う発掘調査で約200m南の現水田の下から夜臼期の甕棺群が出土しており、集落の中心は南側に移動すると思われる。

### 3. 弥生時代の遺構と遺物

調査区内で遺構は確認できなかつた。遺物は丹塗磨研壺、甕棺片、扁平片刃石斧等が出土している。南側の東入部遺跡では1993年度の調査で前期～中期の甕棺墓が200基近く群集して検出され、1995年度の調査では前期の掘立柱建物の集落等も調査されている。

### 4. 古墳時代の遺構と遺物

集落等の遺構は出土しなかつたが、河川を数条確認した。河川の覆土はいずれも砂疊である。周辺の調査区でも見られるように河川の氾濫が繰り返し起きたと思われ、当時では開発不能な荒れ地であったと推測される。河川の中から土師器壺等が出土している。

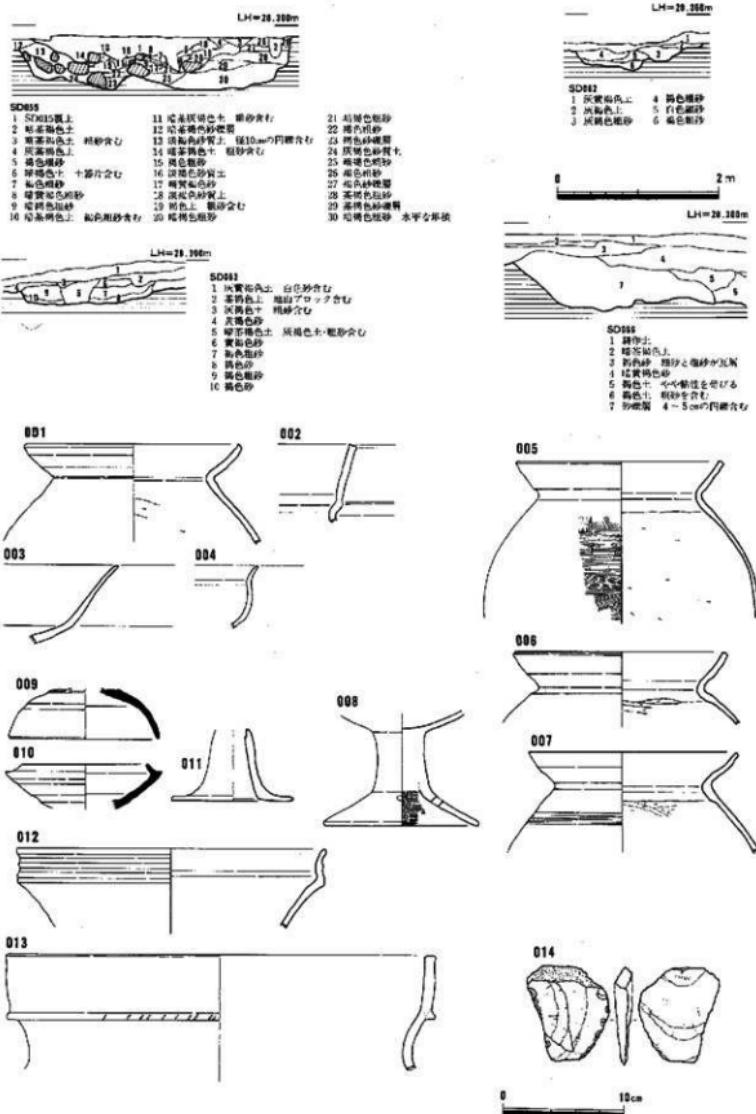
#### (1) 溝

S D 055 (付図) III区の中央西側に位置し、南北に流れる。幅230cm、深さ42cmを測る。断面は浅皿状を呈す。覆土から新旧2条に分けられ、古い堆積は粗砂が水平に堆積している。新しい堆積は20cm程度の礫を多く含む粗砂でレンズ状の堆積である。

S D 016 (付図) III区中央西寄りに位置し、南北に流れる。幅約142cm、深さ29cmを測る。断面は逆三角形を呈す。覆土は白色の粗砂で河川の氾濫によって埋没したと思われる。覆土中から土師壺、高壙とともに黒耀石剣片や突尖文甕片が出土している。出土遺物(第3図001～004)。001・002は甕の口縁である。003は高壙の壙部である。004は甕の口縁である。

S D 029 (付図) III区東側に位置する。幅は約50cm程度で深さは70cm程度である。断面はU字を呈するが底面はかなり凹凸を有する。覆土は粗い砂層である。出土遺物(第3図005～008)。005～007は甕の口縁である。008は高壙の脚部である。

S D 063 (付図) IV-1区中央に位置し、南北に流れる。幅は約160cm、深さ31cmを測る。覆土は



第3図 古墳時代の遺構と遺物 (1/60, 1/4)

褐色の粗砂で水平な堆積である。

**S D 066** (第3図) IV-1区中央東寄りに位置し、北西方向に流れる。東側を S D 060に切られており、幅は不明である。深さは62cmで覆土は4~5cmの円礫を含む砂層である。出土遺物(第3図012~014)。012は縄文後期後半の黒色磨研上器である。013は土師器甕口縁である。復元口径34.9cmを測る。浅橙色で砂を僅かに含む。014は古鉄揮石安山岩製のスクレイバーである。縄文後期の粗製の深鉢の破片が多く出土したが、いずれも小片で接合はできなかった。ローリングはうけていない。

## 5. 古代~中世の遺構と遺物

### (1) I: 墓

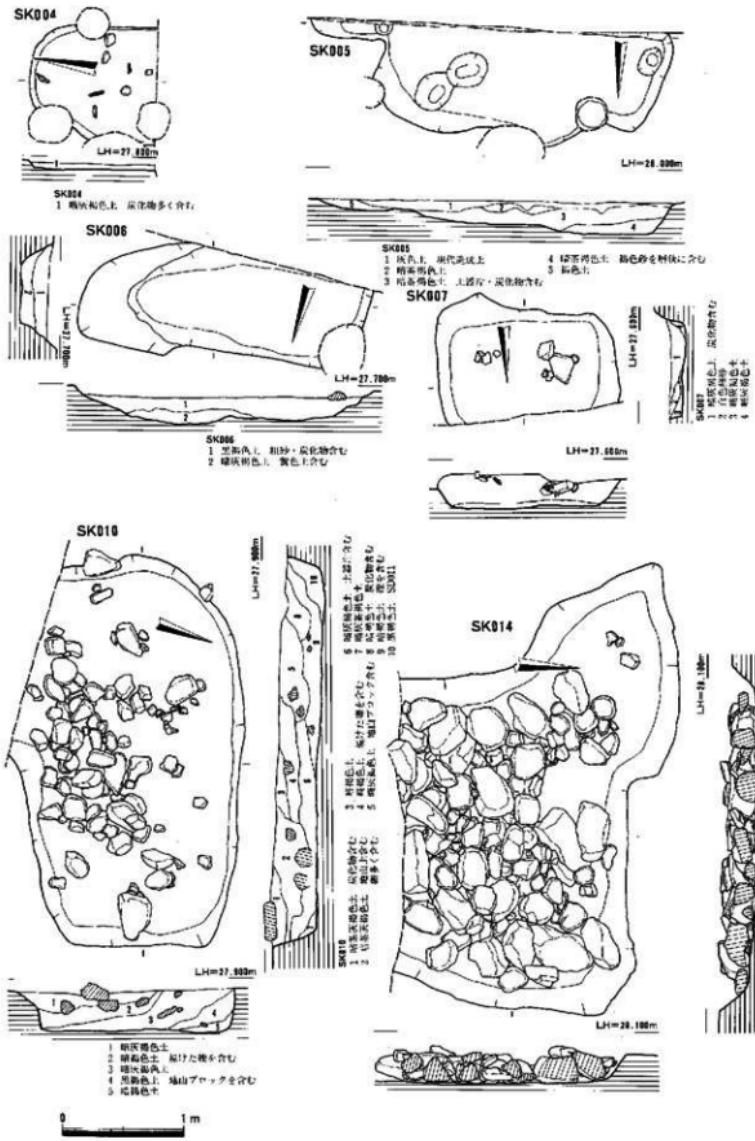
**S K 004** (第4図) I区の中央に位置する。道路の擁壁の下に延びるが現状で南北104cm、東西97cm、深さ8cmを測る。断面浅皿状を呈す。覆土は暗灰褐色土で炭化物を多く含んでいる。細かな骨片が出土しており、墓壙の可能性が考えられる。出土遺物は白磁片、土師皿等が出土している。出土遺物(第8図015・016)。015は土師壺である。復元口径11.9cm、器高2.3cmを測る。淡橙色で白色砂を含む。016は土師皿で復元口径8.8cm、器高1.1cmを測る。淡橙色を呈す。

**S K 005** (第4図) I区の中央に位置する。道路の擁壁の下に延びるが現状で南北98cm、東西298cm、深さ25cmを測る。平面形は隅丸の方形を呈し、断面は浅皿状を呈す。覆土は暗茶褐色土で炭化物を層状に含む。土師壺や白磁碗、土師皿が出土している。出土遺物(第8図017)。017は土師壺である。復元口径12cm、器高2.7cmを測る。暗淡橙色を呈す。

**S K 006** (第4図) S K 005の東側に位置する。南側が道路の擁壁の下に延びるが現状で長径239cm、短径87cmを測る。覆土は水平な堆積で上層は粗砂と炭化物、下層は地山ブロックをふくむ。平面は隅丸の長方形を呈し、断面は浅皿状を呈す。土師皿・土師鍋・拂り鉢・須恵鉢が出土している。出土遺物(第8図018~029)。018は青磁碗である。内面底部に線描きの文様をもつ。釉は厚めで貫入は大きく龍泉窯系のI類である。019は白磁碗である。釉は薄い。020は白磁平底皿で口沿口縁である。021は壺であると思われる。茶褐色を呈し底部は回転糸切りである。022は土壺である。長さ3.5cm、太さ0.85cmを測る。焼成は不良。023~025は土師壺である。それぞれ口径12.1cm、器高1.7cm、口径13.3cm、器高2.5cm、口径11.9cm、器高1.95cmを測る。025は風化のため不明であるが、あとは回転糸切りである。026~029は鉢の口縁である。

**S K 007** (第4図) I区東寄りに位置する。北側が調査区外に延びるが現状で南北103cm、東西147cm、深さ27cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し、断面は浅皿状を呈す。覆土は暗灰褐色土の間に白色粗砂層を含む。青磁平底皿・須恵質長壺・須恵質壺・土師質鉢・土師皿が出土している。土師皿はすべて糸切りである。出土遺物(第8図030~034)。030は青磁平底皿で口径12.2cm、器高3.05cmを測る。釉は薄く貫入は粗い。内面底部に片切彫りの蓮華と樹木文を施す。031は褐釉壺の底部である。032は土師壺である。口径11.3cm、器高2.85cmを測る。淡橙色を呈す。033・034は土師皿である。033は復元口径8.5cm、器高1.3cmを測る。034は口径8.1cm、器高1.4cmを測る。

**S K 010** (第4図) III区の西寄りに位置する。南西側が調査区外に延びるが現状で長径323cm、短径187cm、深さ36cmを測る。平面形は隅丸の長方形であるが南西隅は南側に拡張する。断面は箱形を呈す。覆土は暗茶褐色土を主とし礫を多く含んでいる。土師質鍋・土師皿・滑石製品・土糞の他に、径4cmの橢型壺・磨製石斧などが出土している。土師皿はすべて糸切りである。出土遺物(第8図035~040)。035は青磁碗である。口径は16.6cmを測る。036は白磁碗である。釉は薄く透明なガラス質である。037は大口茶碗である。釉は黒色で不透明。胎土は灰褐色を呈す。038は鉢と思われる。素焼きで赤茶褐色を呈し、白色砂を多く含む。039は土壺である。長さ3.95cm、径1.6cmを測る。040は安山岩



第4回 中世土壤尖測図(1) (1/40)

製の右斧である。

S K014 (第4図) III区の中央西寄りに位置する。調査区の南側に延びるため全体の形状は不明であるが、現状で南北183cm、東西277cm、深さ33cmを測る。平面形は方形を呈し、北西側に拡張部をもつが、別の造構の可能性がある。断面は浅皿状を呈す。覆土中に20~50cmの礫が敷き詰めのように多数出土したが、礫は焼けたものが多い。覆土中から白磁碗・須恵器鉢・須恵質壺・滑石製石鍋・土師皿等が出土している。出土遺物 (第8図041~043)。041は白磁平底皿で口沿口縁である。復元口径11.2cmを測る。042は土師質の鉢である。043は土師皿である。復元口径8.7cm、器高1.1cmを測る。

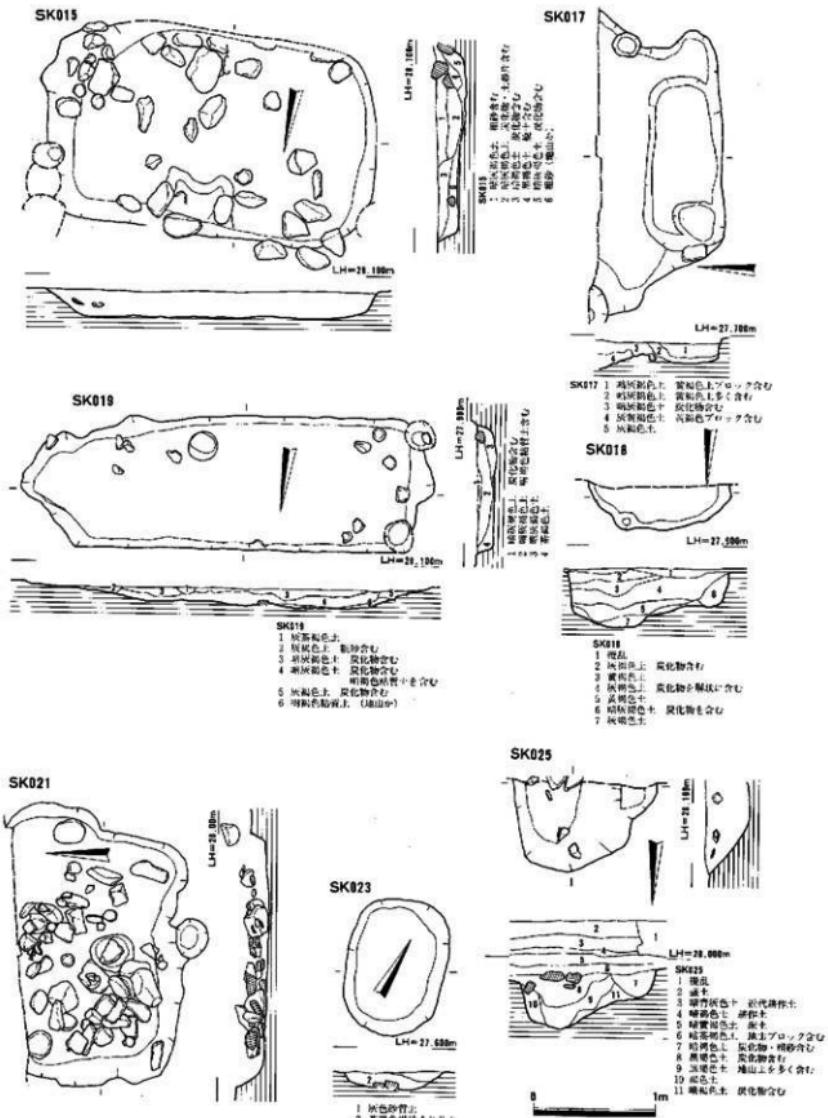
S K015 (第5図) S K014の東側に位置する。SD055を切る。調査区の南側に延びるため全体の形状は不明であるが、現状で南北165cm、東西273cm、深さ23cmを測る。平面形は隅丸の長方形で断面は浅皿状を呈す。床面から浮いて15cm~35cmの礫を含む。白磁碗・須恵鉢・滑石製石鍋・土鍤・土師皿や焼けた粘土塊が出土している。出土遺物 (第8図044~050)。044・045は土師壺である。044は復元口径12.6cm、器高2.7cmを測る。045は口径12.5cm、器高2.7cmを測る。046は土師皿である。復元口径9.1cm、器高1.0cmを測る。3つとも回転糸切りである。047は土鍤である。長さ4.1cm、径0.8cmを測る。048は玉縁の白磁碗である。049・050は鉢口縁である。049は土師質で口縁に突帯をもち、上面に縦目圧痕を施す。050は須恵質である。

S K017 (第5図) I区の中央に位置する。調査区の北側に延びるため全体の形状は不明であるが、現状で南北100cm、東西249cm、深さ19cmを測る。平面形は隅丸の長方形で断面は北側に傾斜している。南側に隅丸長方形の窪みがみられるが、S K017が埋没した後掘り込まれており、別の造構である。外面に連弁をもつ龍泉窯系の青磁碗や土師鍋・土師皿・土鍤等が出土している。出土遺物 (第8図051~053)。051は土師皿である。051は復元口径8.6cm、器高1.6cmを測る。052・053は土鍤である。052は長さ4.7cm、径1.1cm、053は長さ3.4cm、径1.2cmを測る。焼成は不良で擦耗が激しい。

S K018 (第5図) I区の中央に位置する。S K053に切られる。道路の擁壁を潜ってIII区に延びており南北162cm、東西116cm、深さ48cmを測る。断面は箱形を呈す。白磁片・青磁碗・土師壺・土師椀・土師鍋等が出土している。出土遺物 (第8図054・055)。054は土師壺である。口径12.8cm、器高2.4cmを測る。055は土師皿である。口径9.0cm、器高1.0cmを測る。浅橙色を呈す。

S K019 (第5図) III区の中央西寄りに位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、長径337cm、短径111cm、深さ14cmを測る。断面は浅皿状を呈し、覆土は水平な堆積で上層は炭化物をわずかにふくんでいる。同安窯系の青磁碗や土師椀・土師皿が出土している。出土遺物 (第9図056~059)。056は青磁碗である。口径16.3cmを測る。外面に横で縦線を刻んでいる。外面は半釉である。057・058は土師皿である。057は口径9.8cm、器高1.25cm、058は口径9.6cm、器高1.8cmを測る。両方ともヘラ切りである。059は土鍤である。長さ3.0cm、径0.65cmを測る。

S K021 (第5図) II区に位置する。西側を少し切られるが現状で南北143cm、東西232cm、深さ36cmを測る。平面形は隅丸の方形を呈し、断面は浅皿状をなす。覆土は暗灰茶褐色土で炭化物、粗砂を含む。連弁をもつ龍泉窯系青磁碗や青磁平底皿・滑石製石鍋・黒釉・模型漆が出土している。出土遺物 (第9図061~071)。061は青磁平底皿である。062は白磁平底皿である。復元口径10.2cmを測る。釉はやや青みを帯び、薄い。貫入はない。外面は半釉である。063・064は土師質の盤である。口径は063が20.7cm、064が約24.3cmを測る。065は滑石製の石鍋である。内面は丁寧に磨いており、繩の痕跡は見られない。066・067は土師壺である。066は口径12.9cm、器高2.75cm、067は口径13.0cm、器高2.75cmを測る。白色砂と雲母片を含む。068~071は土師皿である。068は口径8.4cm、器高1.1cm、069は口径8.6cm、器高0.9cm、070は口径8.1cm、器高0.8cm、071は口径8.8cm、器高1.15cmを測る。すべて回転糸



### 第5図 中世上擴実測図(2) (1/40)

切りで069は板状圧痕がみられる。069・070は雲母片を含む。

S K 023 (第5図) II区に位置する。SD022に切られる。平面形は橢円形を呈し、長径113cm、短径82cm、深さ14cmを測る。断面は浅皿状で覆土は茶褐色粗砂混じり土である。褐釉土器と土師器小片が出士している。060は土師質の鉢である。

S K 025 (第5図) III区の中央西寄りに位置する。南側が調査区外に延びる。現状で東西118cm、南北80cm、深さ39cmを測る。南北断面は逆台形で西側にテラスをもつ。覆土は地山ブロックを含む黒褐色土でレンズ状の堆積である。土師楕・土師皿が出土した。出土遺物(第9図072～074)。072は土師碗である。復元口径16.7cm、器高5.5cmを測る。内面は丁寧なミガキで外面はナデを施す。073は白磁碗である。釉は薄くやや青みを帯びる。胎土は白色を呈す。内面底部に文様が施されている。074は土師皿である。口径10.1cm、器高1.45cmを測る。外面底部はヘラ切りである。

S K 026 (第6図) SK025の東側に位置する。SD016を切る。南側が調査区外に延びるので全体の形状は不明であるが現状で南北157cm、東西324cm、深さ27cmを測る。平面形は丸い方形を呈し、断面は浅皿状である。覆土は暗茶褐色土で炭化物を含む。土師皿片が多数出土した。調整は不明なものが多いが、確認できたのはすべて糸切りである。

S K 030 (第6図) III区の東側に位置する。平面形は東西に長い橢円形を呈し、南側中央が大きく括れる。長径246cm、短径87cm、深さ12cmを測る。断面は浅皿状で覆土は水平に堆積している。土師皿片と鉢の口縁が出土した。出土遺物(第9図075・076)。075は白磁碗である。釉は薄灰色を呈す。076は土師器鉢である。口縁外面に一条の沈線を施す。

S K 034 (第6図) III区の中央東寄りに位置する。SD027・SD028を切る。平面形は半円形を呈し、長径179cm、短径88cm、深さ14cmを測る。断面は浅皿状である。覆土は単層で褐色土を呈す。黄褐色土ブロックを含む。白磁・青磁小片の他に鉄片が出土している。出土遺物(第9図077)。青磁碗である。釉はやや厚く浅緑色を呈す。質入は粗い。

S K 036 (第6図) III区中央に位置する。SE045を切る。北側が道路の擁壁の下に延びており、全体の形状は不明であるが、現状では半円形をしており、南北88cm、東西150cm、深さ19cmを測る。断面はレンズ状である。土師壺・土師皿・土師鍋・土師質擂り鉢・砾石が出土した。出土遺物(第9図078～080)。078は土師皿である。口径8.8cm、器高1.7cmを測る。雲母片を含む。079は土師壺である。口径11.8cm、器高2.95cmを測る。080は砾石である。砂岩製で目は粗い。

S K 039 (第6図) III区中央西側に位置する。北側が調査区外に延びており全体の形状は不明であるが、現状では長径95cm、短径86cm、深さ19cmを測る。断面浅皿状を呈し、南側に浅いテラスをもつ。糸切りの土師皿片や黒羅石の刷片が出土した。出土遺物(第9図081～084)。081・082は青磁碗である。深縁を呈す。082は外面に錦絣弁を施す。釉は厚めで外面底部と疊付けは無釉である。083・084は土師皿である。083は復元口径10.9cm、器高1.3cm、084は復元口径9.1cm、器高1.0cmを測る。

S K 041 (第6図) III区中央に位置する。隅丸の長方形を呈し、長径306cm、短径212cm、深さ83cmを測る。SD001から水を引き込んだものと思われる。覆土は上層と下層に分けられ、上層はレンズ状の堆積で粗砂・細砂のブロックを含む黄褐色砂質土である。下層は水平な堆積で黄褐色土と砂が薄く交互に堆積し、その中には20cmほどの礫が含まれていた。覆土からは白磁・青磁碗・須恵器の大甕片・土師鍋・土師皿・鐵滓が出土している。中でも土師皿は細片がパンケース2箱と多く出土しており、水に関する祭祀なども考えられる。その他、上層から開元通宝など銅錢3枚と漆製品が出土している。銅錢は3枚が接着して出土している。出土遺物(第9図085～096)。085は青磁碗である。釉は薄く質入はない。内面に輪花文を施す。086～089は白磁である。086の外面は無釉でヘラ削りである。087・

088は口禿でともに平底皿と思われる。090は陶質の壺か鉢で内面に緑色の薄い釉を施す。貫入は細かい。091は土師壺である。復元口径12.0cm、器高2.75cmを測る。回転糸切りである。092～094は土師皿である。092は復元口径9.2cm、器高1.3cm、093は口径7.3cm、器高1cm、094は口径8.7cm、器高1.4cmを測る。回転糸切りである。095は扁平片刃石斧である。096は石皿である。

**S K042** (第7図) S K041の東側に位置し、同一の遺構である可能性がある。現状で周辺より20cmほど低くなってしまい、覆土に粗砂と炭化物を含む。擁壁の北側部分は2次の調査区であるが、当遺構につながる可能性がある遺構が見られ、それを含めると東西580cm、南北約470cmの隅丸方形を呈す。糸切りの土師皿・土師壺・褐釉長壺・滑石製石鍋・土師鍋・土鍬・鐵鋤が出土した。出土遺物(第10図097～103)。097は褐釉の壺か。内面は全面に褐色の釉がかかるが外表面は一条たれているのみである。098は滑石製石鍋で外表面は炭化物が厚く付着している。099は七峰壺である。復元口径12.3cm、器高2.2cmを測る。100～102は土師皿である。それぞれ口径は8.9cm、8.7cm、9.6cm、器高は1.7cm、1.0cm、1.3cmを測る。いずれも回転糸切りで101は板状压痕を施す。103は土鍬である。両端とも少し削られていて現状で長さ6.1cm、径1.9cmを測る。

**S K048** (第7図) III区中央に位置する。南側が調査区外に延びるが現状で梢円形を呈し、長径116cm、短径45cm、深さ76cmを測る。断面は逆台形である。褐釉土器と土師皿・土師壺が出土した。

**S K049** (第7図) III区中央に位置する。S K050を切る。平面形は不整な梢円で長径118cm、短径67cm、深さ58cmを測る。断面は東側にテラスをもち、階段状を呈す。白磁碗・青磁平底皿・土師碗・内黒土師碗・土師皿の他に繩文後期の粗製深鉢片が出土した。出土遺物(第10図104)。内黒の土師碗である。胎土は精良である。

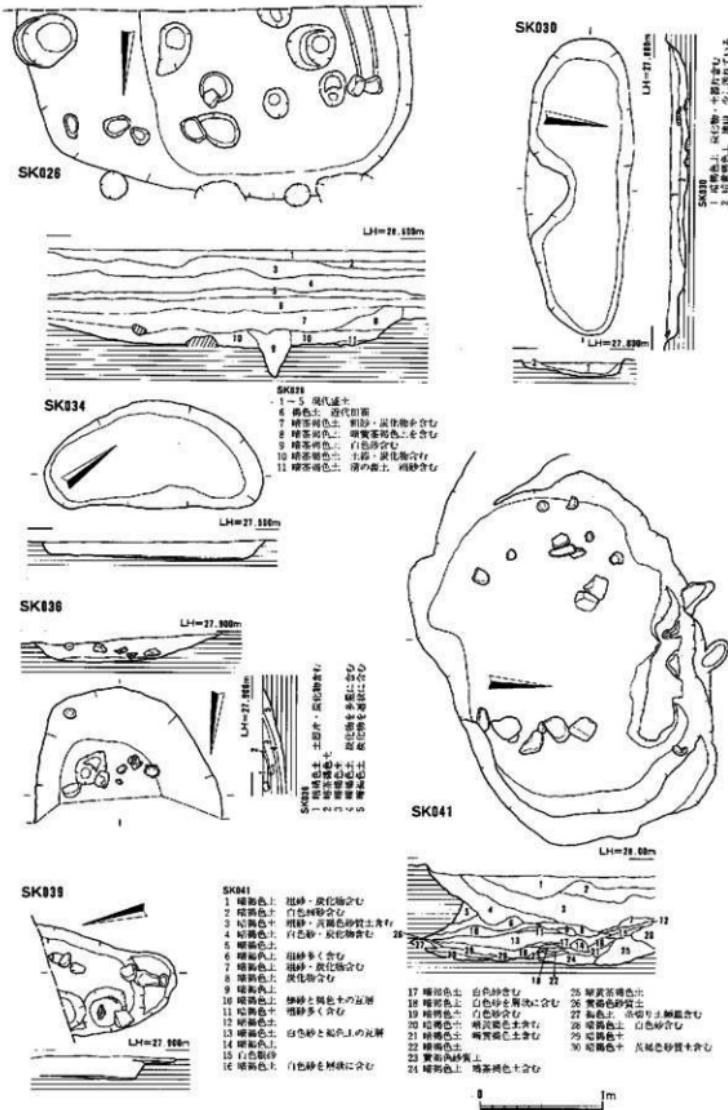
**S K050** (第7図) III区中央に位置する。北側をS K049に切られ、南側は調査区外に延びる。全体の形状は不明であるが、溝である可能性が高いと考えられる。断面は浅皿状を呈す。覆土中に20cm前後の礫をびっしりと含んでいる。白磁平底皿・土師器碗・鐵釘が出土している。出土遺物(第10図105・106)。105は白磁平底皿である。釉は薄く細かな貫入が入る。外底部は無釉である。106は土師碗である。褐色を帯びる。白色砂を含む。焼成は不良である。

**S K051** (第7図) III区中央西寄りに位置する。平面形は不整円形を呈し、径は89cm、深さ21cmを測る。断面は浅皿状を呈す。須恵質鉢・土師皿が出土している。出土遺物(第10図107)。須恵質の鉢である。白色砂を多く含む。

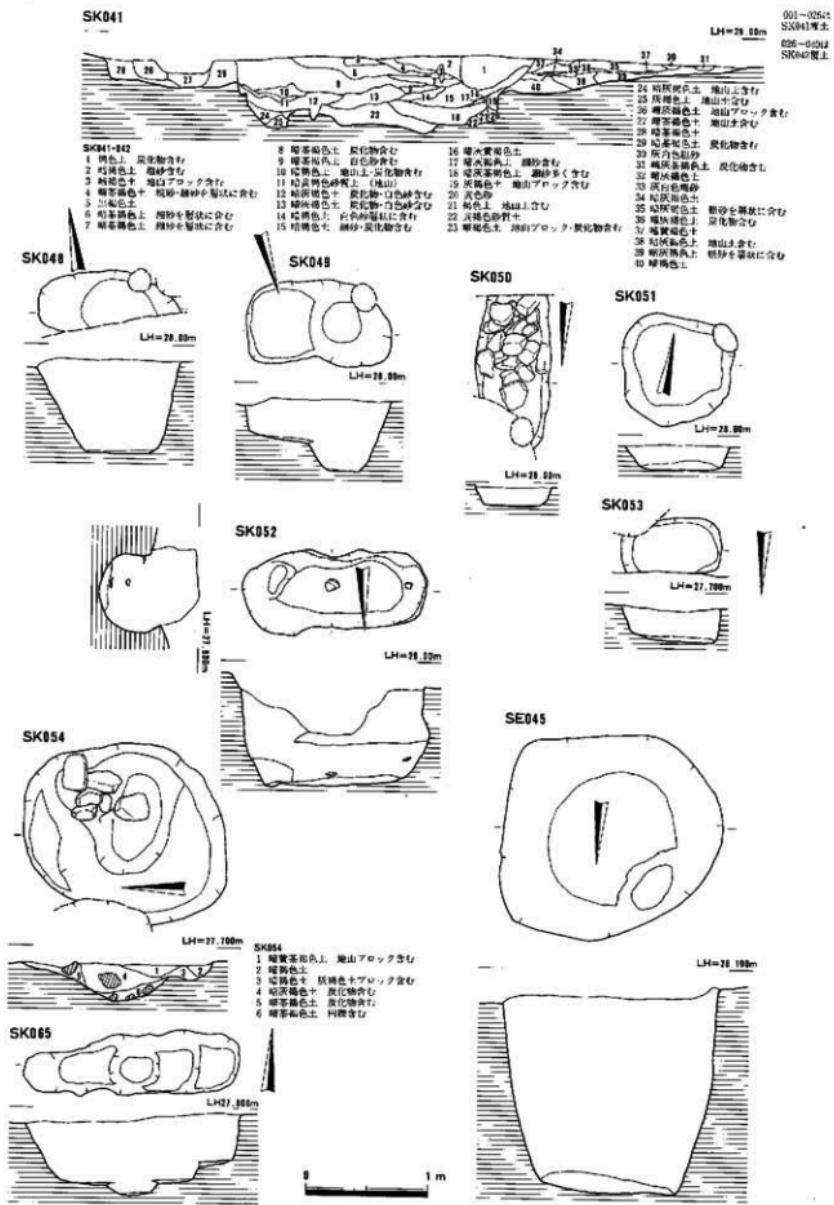
**S K052** (第7図) III区中央に位置する。SD037に切られる。平面形は東西に長い梢円形を呈し、長径152cm、短径63cm、深さ79cmを測る。断面は箱形を呈し、覆土は灰黄褐色土で粘土を含む。土壇墓と思われる。覆土中から黒色土師碗が出土している。出土遺物(第10図108・109)。両方とも黒色土器である。108は口径14.6cm、器高5.55cmを測る。細かな白色砂を含む。磨耗ははげしい。両方とも完形ではなく床面からも浮いており、副葬品ではない。109は底径5.8cmを測る。

**S K053** (第7図) III区中央東寄りに位置する。SD038に切られる。平面形は隅丸の長方形を呈し、長径83cm、短径42cm、深さ28cmを測る。断面は箱形を呈す。青磁碗の小片と土師皿・土師碗片が多数出土している。出土遺物(第10図110・111)。土師皿である。110は復元口径9.8cm、器高1.4cm、111は復元口径6.8cm、器高1cmを測る。2枚とも回転糸切りである。

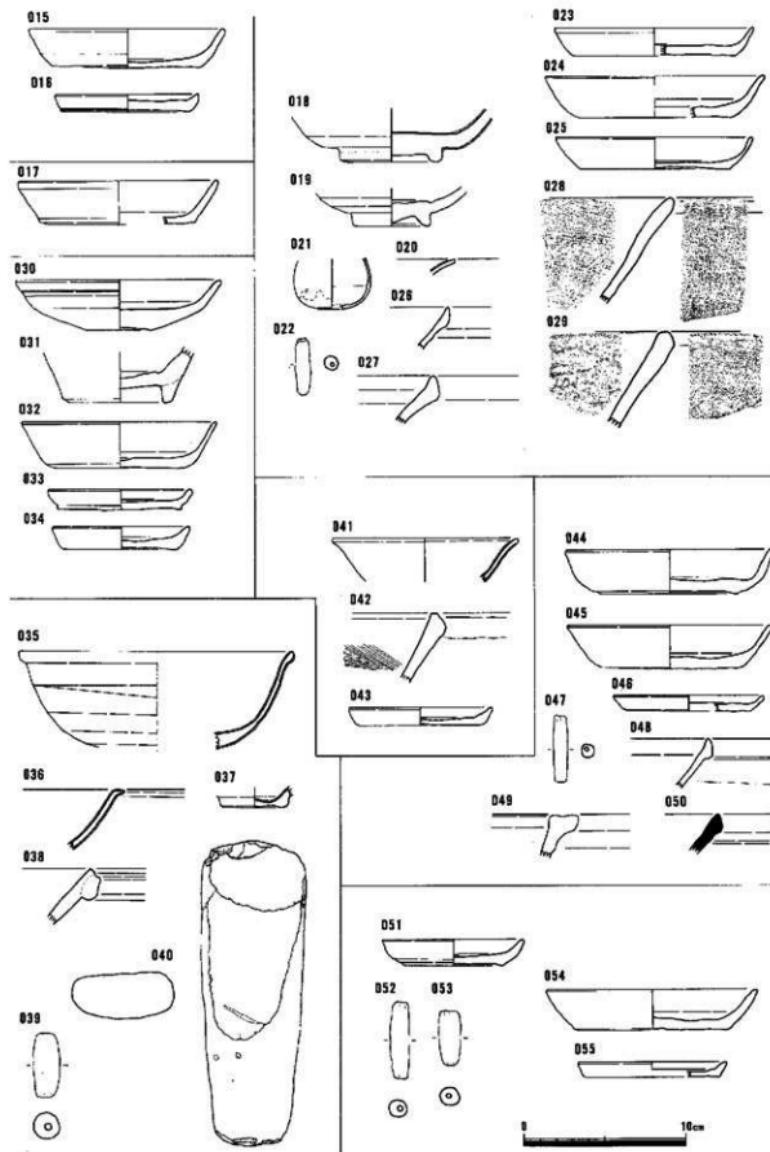
**S K054** (第7図) III区S E045の東側に位置する。SD038に平行する溝に切られる。平面は円形で径162cm、深さ38cmを測る。断面はレンズ状で覆土は暗灰褐色土を主とし10cm前後の礫を多く含む。鎌連弁をもつ青磁碗や白磁・土師鍋・擂り鉢・鐵鋤等の他に弥生中期のM字突縁をもつ甕棺の破片が出土している。表面は著しく風化していた。出土遺物(第10図112～114)。112は白磁合子である。口縁



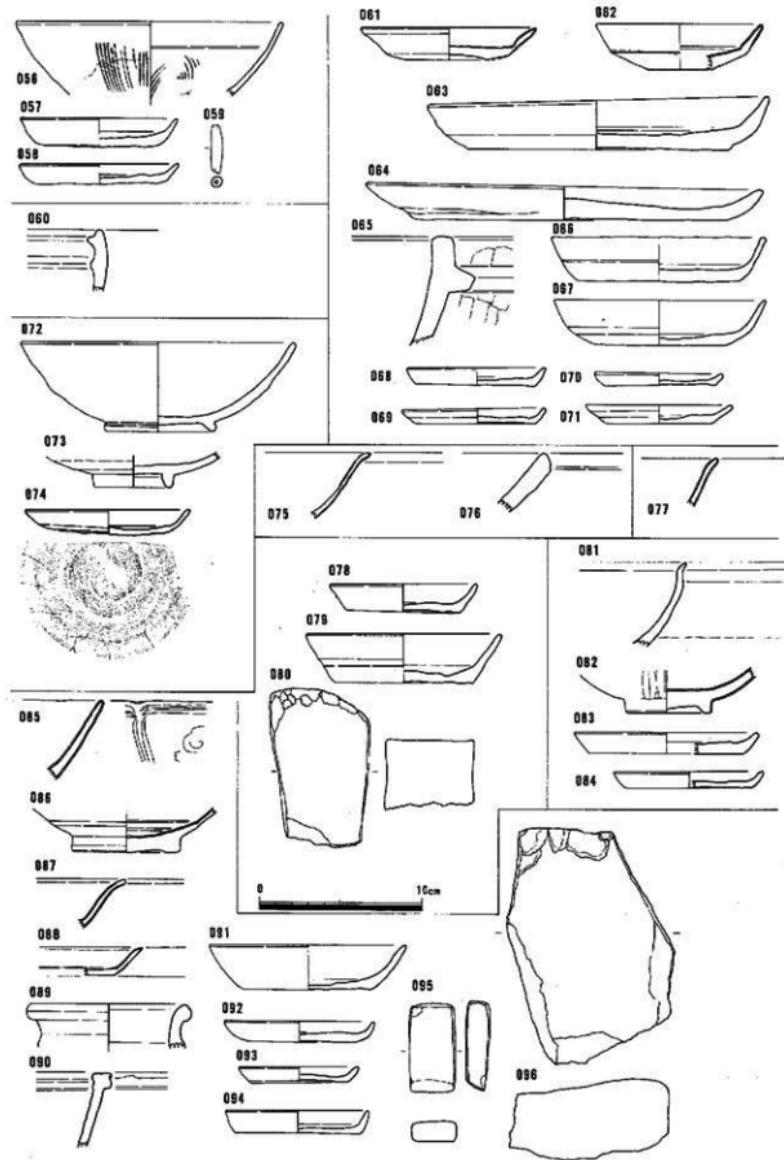
### 第6図 中世土壤実測図(3) (1/40)



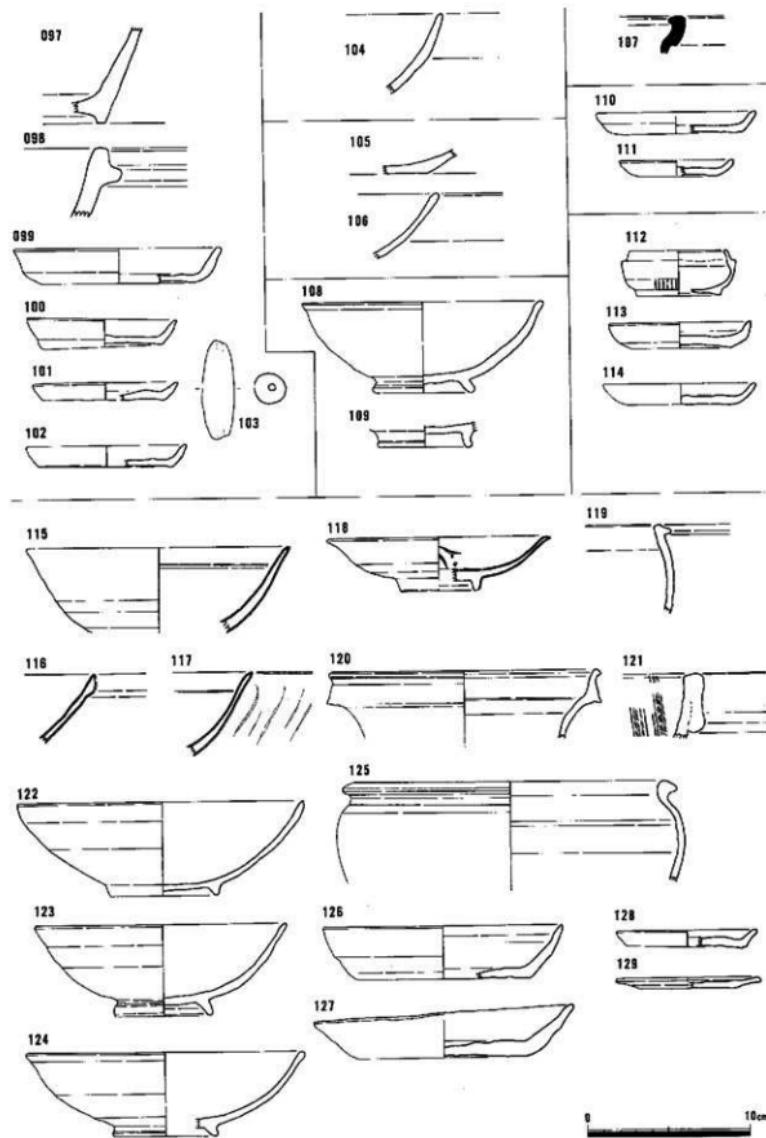
第7図 中世土壤実測図(4) (1/40)



第8図 中世土壇出上遺物実測図(1) (1/3)



第9図 中世土壤出土遺物実測図(2) (1/3)



第10図 中世土壤出土遺物実測図(3) (1/3)

部は両面とも無釉である。外面は胴部に施釉してありその下に縱方向の沈線を施す。113・114は土師皿である。113は口径8.7cm、器高1.55cm、114は口径9.2cm、器高1.3cmを測る。

S K 065 (第7図) IV-1区東側に位置する。平面は東西に長い溝状で長径176cm、短径48cm、深さ67cmを測る。断面は中央が一番低く両側に階段状にあがっている。土師楕片が出土している。

S K 067 (付図) S K 065南側に位置する。方形を呈し南北117cm、東西102cmを測る。出土遺物なし。

## (2)井戸

2次調査では本調査区に隣接する南側に素掘、または石組みの井戸が多数検出されており、本調査区でも多数の井戸の出土が予想された。しかし、調査の結果素掘の井戸1基を確認したにとどまった。

S E 045 (第7図) III区中央に位置する。平面形は不整な円形を呈し長径183cm、短径168cm、深さ168cmを測る。断面は逆台形である。北西側が一段わざかに窪んでいる。掘り方は地山である厚さ124cmの暗黄褐色砂質土とその下の厚さ34cmの暗褐色砂層を掘りぬいてその下の暗褐色礫層に達している。土師楕・玉縁の白磁碗・灰釉大甌・滑石製石鍋・黒色土師楕の他に土師盤も出土している。出土遺物(第10図115~129)。115~118は白磁である。115~117は碗で、115は復元口径16.0cmを測る。釉は薄く貫入はない。内面底七に2条の沈線が施されている。116は玉縁の口縁である。117は口縁は輪花で種薄く貫入なし。外面に片切彫りで絞線文を施している。118は高台付の皿で復元口径13.3cm、器高3.3cmを測る。釉は貫入ではなく内面に模描き文を施す。119は陶質の鉢である。黒色を呈し、ナデ調整を施す。120は須恵質壺である。復元口径は16.1cmを測る。ナデ調整である。121は須恵質の壷である。口縁は粘土帯を貼り付け厚くしている。暗茶褐色を呈し、ナデ調整である。122・123は土師楕である。内外面とも丁寧な磨きを施している。124は黒色土師楕である。復元口径16.7cmを測る。表面の磨耗が激しく調整は不鮮明である。125は土師質の鉢である。黒色を呈す。調整は不明である。復元口径は18.8cmを測る。126・127は土師杯である。128・129は土師皿である。128は糸切り、129はヘラ切り後ナデて板状圧痕を施している。

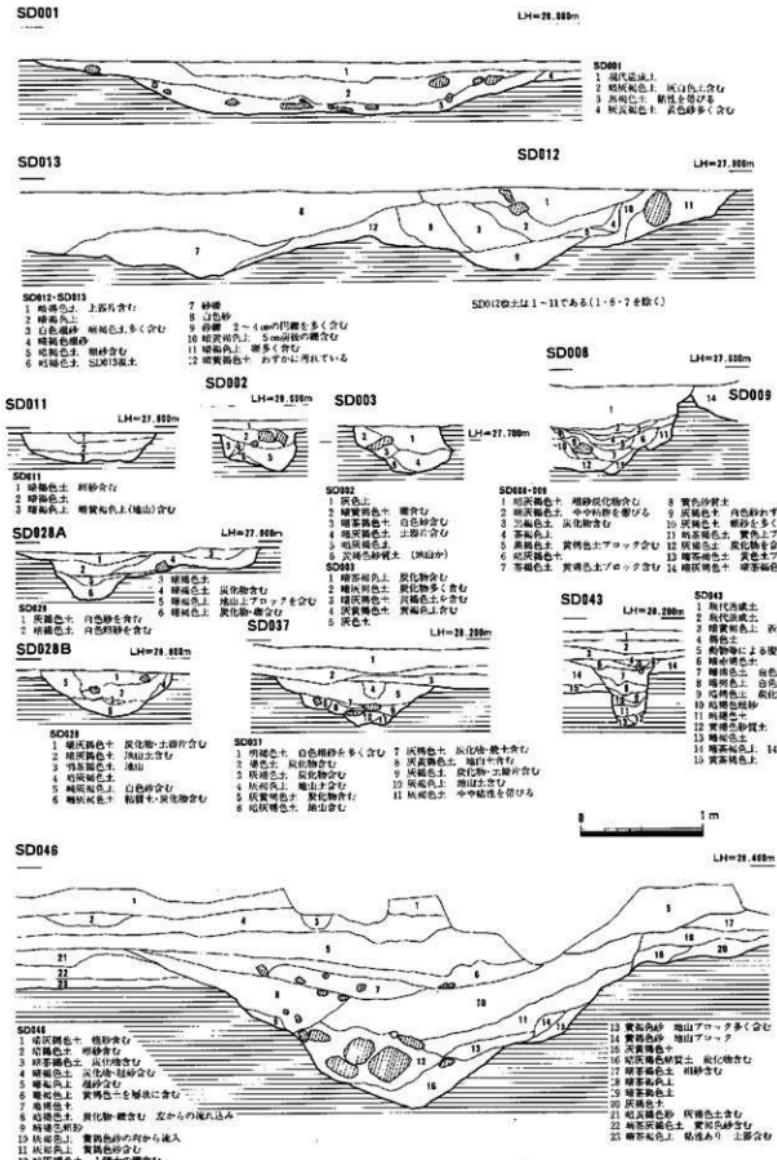
## (3)溝

調査区内で16条検出した。11世紀の条里に沿う溝と居館を巡る溝である。

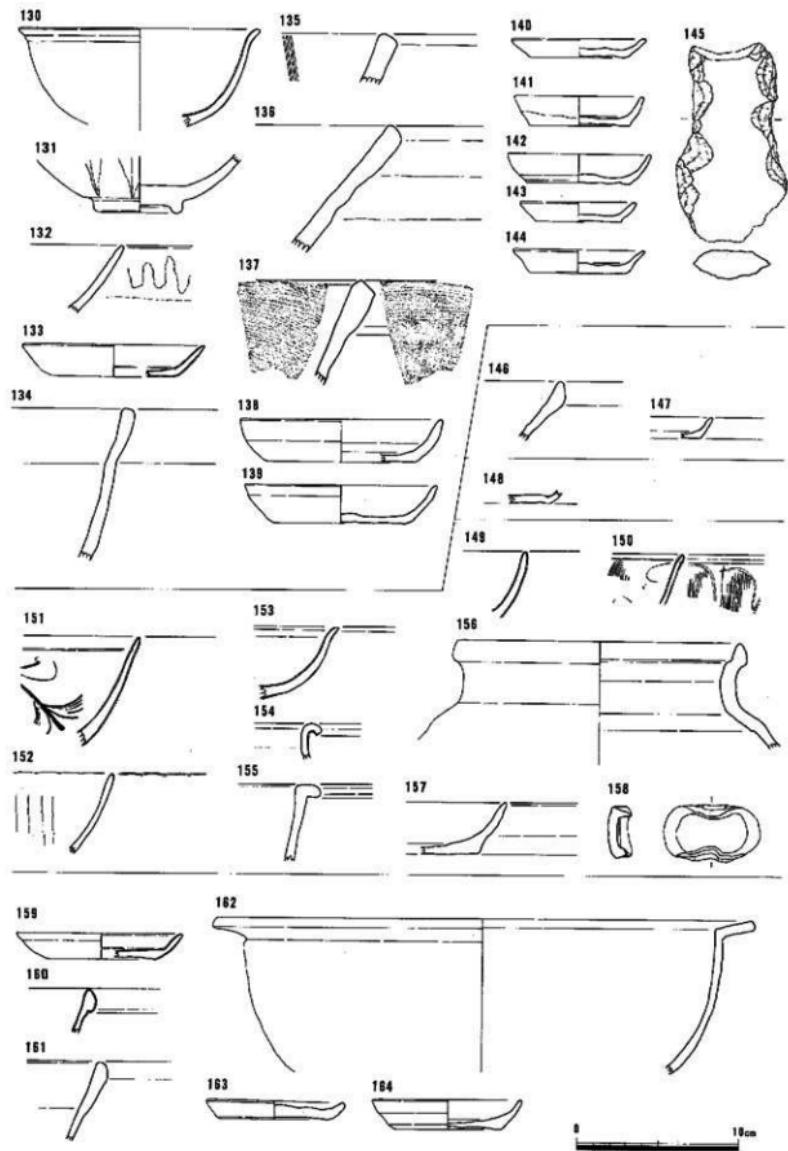
S D 001 (第11図) III区中央に位置する。2次調査で確認された居館跡の周濠の東側部分である。I区とIII区の境でクランク状に屈曲する。S K 052を切る。幅は北側で約170cm、深さ35cm、南側で120cm、深さ38cmを測る。覆土は底面から10cmほど暗灰褐色の粘質土が堆積しており、水が溜まっていた痕跡を示す。溝の底からわざかに浮いた状態で漆の楕が出土したが、残りが悪く取上げに失敗してしまった。出土遺物(第12図130~145)。130・131は青磁碗である。130は外面に模描き状の線がかかるに見える。131は外面に蓮弁をもつ。132・133は白磁である。132は外面は半釉である。貫入はない。133は平底皿で復元口径11cmを測る。釉は薄く貫入はない。VII-2類か。内面底部に印文をもつ。134は土師器鍋である。外面2次焼成で黒色を呈す。135は土師質の壷である。136・137は鉢である。136は瓦質で内面は斜めハケを施す。137は土師質である。外面は剥離が激しい。138~144は土師質の壷と皿である。底部はすべて糸切りである。145は安山岩製の打製石斧である。

S D 002 (第11図) I区中央西寄りに位置する。S D 001と主軸方向が同じである。III区北端で切れ、そこから浅い溝が東に曲がっている。幅約63cm、深さ41cmを測る。覆土は上層に10~20cmの礫を多く含んでいる。覆土中から土師鍋が出土している。出土遺物(第12図146・147)。146は土師質の鉢である。147は土師皿である。調整は不明。

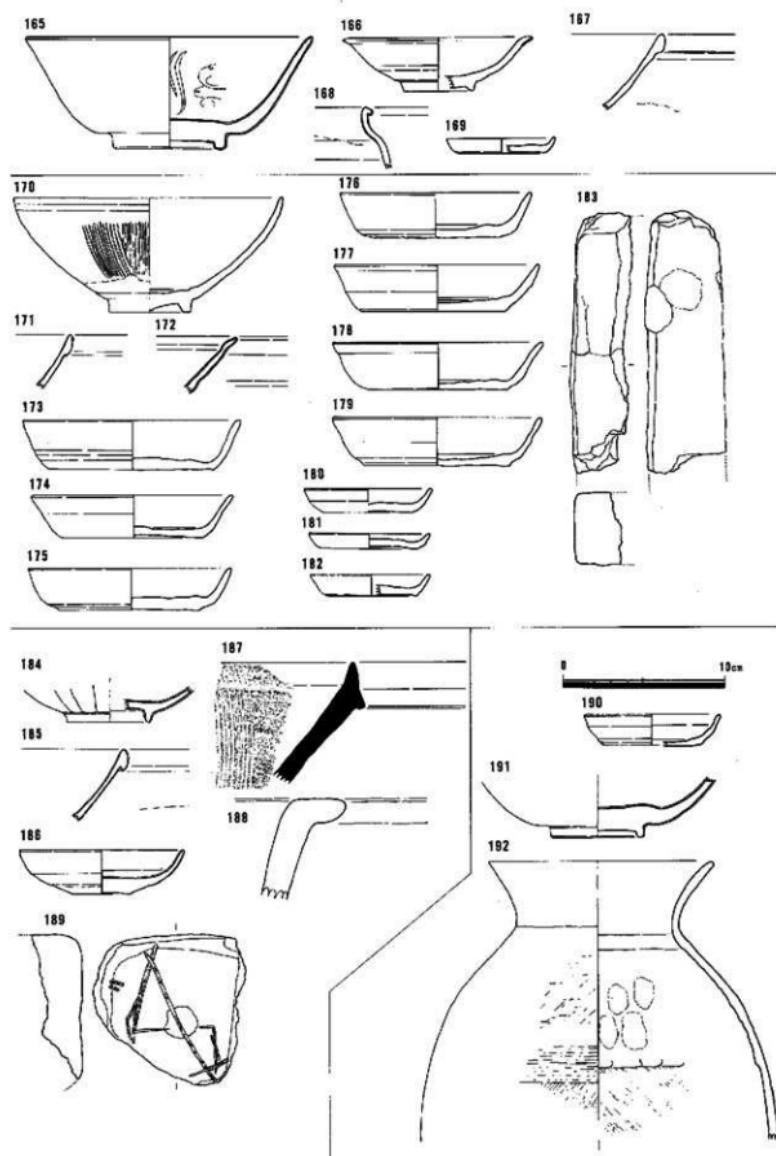
S D 003 (第11図) S D 002の東側に位置し、併走する。III区の北端で切れ、浅いS D 038が東に曲がる。幅約66cm、深さ49cmを測る。覆土には滲水、流水の痕跡はみられない。白磁平底皿・青磁碗・糸



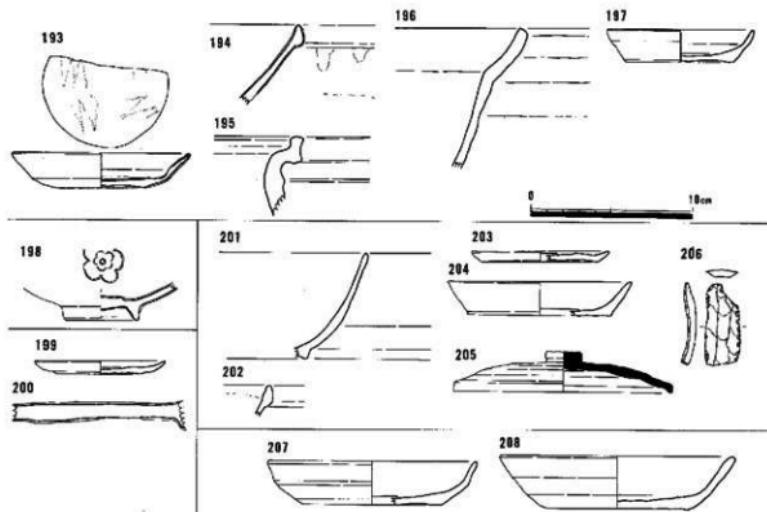
第11図 中世溝遺構図 (1/40)



第12図 中世溝出上遺物尖測図(1) (1/3)



第13図 中世溝出土遺物実測図(2) (1/3)



第14図 中世溝出土遺物実測図(3) (1/3)

切りの土師皿・土師鍋が出土している。出土遺物（第12図148）。白磁平底皿である。胎は薄く外底部の0.5cm上から無胎である。

S D 008 (第11図) I区の東端に位置する。調査区に一部のみかかっており全容は不明である。幅は120cm以上、断面は2段の階段状をなし、深さは76cmを測る。覆土はレンズ状の堆積で地山のブロックを含み、20~40cmほどの礫を多く含む。土塁、石垣等の存在が考えられる。周濠東側の別区の東端の堀である可能性をもつ。北側にのびており、今後の調査が期待される。3~4回の掘り直しがあったと思われる。覆土中から龍泉窯系の青磁碗・口禿の白磁平底皿・土師器鍋などが出土している。出土遺物（第12図149~158）。149~152は青磁碗である。149は胎は明白灰色で薄く透明である。貫入は細かい。両面とも無文である。150は同安窯系である。胎は暗オリーブ色で薄く透明である。貫入は少ない。両面に櫛描き文を描いている。151は胎は厚めで緑色を帯びる。貫入は少なく気泡が多くみられる。内面に蓮華折枝文が描かれている。152は口縁は輪花で内面に放射状の蚯蚓體のような線がみられる。153は白磁碗である。胎は灰色を呈し薄く不透明である。貫入はない。154は白磁である。蓋の口縁と思われる。胎は褐色を帯び、薄く透明である。貫入は細かい。胎上は白灰色である。155は七峰質の甕である。外面は2次焼成をうけ黒色である。白色砂を多く含む。156は瓦質の甕である。両面とも銀色を呈し、胎土は灰色で白色砂を含む。内面は斜めの刷毛目、外面は継刷毛を施す。復元口径は17.4cmである。157は土師壺である。白色砂と雲母片を含む。158は土師皿である。成形後の乾燥しないうちに親指と人差し指で摘み、口縁を折曲げている。長径6cm、短径2.1cmで糸切りである。

S D 009 (第11図) S D 008の南側に位置する。擁壁の下に潜り込んでおり、幅は不明で深さは21cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。白磁片を多く含む。出土遺物（第12図159~164）。159・160は白磁である。159は口禿の平底皿である。胎は薄く全面に施釉し、口縁は丁寧に削りとっている。160は熱で発泡している。161は土師質の鉢である。162は土師鍋である。復元口径32.8cmを測る。外面と口縁に煤が付着し黒色を呈す。163・164は土師皿である。163は復元口径8.2cm、器高1.2cm、164は口径8.

9cm、器高1.8cmを測る。底部は糸切りである。

S D011 (第11図) III区の西側に位置する。S K010に切られる。幅は最大で140cm、深さ33cmを測る。覆土は暗褐色土である。青磁・白磁の他に須恵器大甕・土師椀・火鉢・土師皿多数が出土している。出土遺物(第13図165~169)。165は青磁碗である。内面に雲文を施し見付は無釉である。龍泉窯系I~6類である。166~168は白磁である。166は高台付皿で釉は薄く外底部と高台の一部は無釉である。167は玉縁の碗である。外面は半釉である。168は壺である。釉は薄くやや灰色を呈す。内面下半は無釉である。169は土師皿である。復元口径6.6cm、器高0.95cmを測る。回転糸切りで胎土は砂を含まず、焼成は良好である。

S D012 (第11図) S D011の西側に位置し併走する。幅は最大で273cm、深さ32cmを測る。覆土はややレンズ状の堆積をみせ、4~5cmの円錐を含む粗砂層である。青磁碗・白磁碗や糸切りの土師皿の他に天目釉の小片が出土している。出土遺物(第13図170~183)。170は青磁碗である。外面は半釉で横で縱方向に線を引いている。171は玉縁の白磁碗である。172は天目の碗である。釉薄い。173~179は土師坏である。いずれも糸切りで174~178は板状圧痕がみられる。180~182は土師皿である。風化のため判別しづらい、回転糸切りと思われる。183は土版状の土製品である。素焼きで浅橙色を呈す。表面にスサ痕跡や指オサエがみられる。

S D013 (第11図) III区の西端に位置する。北西方向に位置する。2次調査のS D0060にあたり、条里制の区画に沿う大溝である。覆土は上下2層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は砂疊層である。覆土中から鎌倉時代の青磁碗や、玉縁の白磁・褐釉壺・須恵質の擂り鉢・土師鍋・轆の羽口などが出土した。出土遺物(第13図184~189)。184は鎌倉弁の青磁碗である。釉は厚く水色を呈す。185は玉縁の白磁碗である。186は白磁平底皿である。外面は半釉である。釉は薄いが気泡が多く半透明である。187は須恵質の鉢である。188は土師質の鍋か。189は土版状の土製品である。表面にスサの痕跡がつく。

S D020 (付図) II区に位置する。幅38cm、深さ18cmを測る。覆土は暗褐色土で底から4cmは暗褐色の砂を含んでおり、緩やかに流れていると思われる。土師皿・坏片多数・滑石製石鍋が出土している。

S D027 (付図) III区西寄りに位置する。S D043に切られ、S D028を切る。幅は最大で92cm深さ19cmを測る。龍泉窯系青磁碗・土師椀・土師鉢・鐵滓・磁石が出土している。出土遺物(第13図190~192)。190は土師皿である。191は青磁碗である。釉は青色で薄く雜にかけている。疊付から見込みは無釉である。192は土師質の壺である。暗橙色を呈す。外面は刷毛目、内面には粘土帯の接合跡が残っている。

S D028 (第11図) III区東側に位置する。最大幅116cm、深さ28cmを測る。覆土は底部は暗灰褐色の粘質土で滲水していたと思われる。5層は白色砂を含み幾分流れていたと思われる。一度埋没した後掘り直している。底面上に人頭大の礫が多数出土した。西側では断面半円状を呈し、一部白色砂を含むが地山ブロックを多く含んでいる。覆土中から鎌倉弁青磁碗・青磁小皿・玉縁白磁碗・須恵系壺・高麗青磁・古瀬戸壺等が出土している。青磁には熱を受け変色したものもある。出土遺物(第14図193~197)。193は青磁平底皿である。釉は緑灰色を呈し、薄く貫入はやや大きめである。見込みは無釉である。194は玉縁の白磁碗である。195は褐釉の大甕口縁で、口縁内面に灰かぶりがみられる。196は土師質の鍋である。外面は炭化物が付着している。197は土師坏である。底部は回転糸切りである。

S D043 (第11図) III区中央東寄りに位置する。南側は調査区外に延びる。幅は55cm、深さ61cmを測る。断面はU字型を呈し覆土は水平な堆積である。細砂層・粗砂層・その他が交互に堆積しており、水が流れているのが判る。北側が切れているが、水が流れていることから、S D002と一段底が高い溝で繋がっていたと思われる。S D002との切れ目は居館内と別区の間の道と思われる。覆土中からは青

磁碗・土師鍋・土師皿等が出土している。出土遺物(第14図198)。青磁碗である。釉は薄い緑色で細かな貫入が入る。内面底部に梅の花の文様がつく。

S D 046 (第11図) III区西端に位置する。2次調査のS D0102にあたり、居館環濠の西側である。最大幅190cm、深さ90cmを測る。断面はV字をなし、覆土中に人頭大の礫を多量に含んでいる。青磁碗底部・須恵質大甕・青磁高台付盤・鉄器等が出土した。出土遺物(第14図199・200)。199は土師皿である。口径7.9cmを測る。200は青磁の盤である。釉は厚く深緑色を呈す。貫入はない。内面底部に文様あり。

S D 055 (付図) III区中央西側に位置する。やや北東側に流れる。幅は130~150cm、深さ30cmを測る。覆土は2~3cmの小礫を含む砂礫層でかなり流れが速かったと思われる。出土遺物(第14図201~206)。201は土師椀である。202は土師器鉢である。203は土師皿である。回転糸切りである。204は土師坏、205は須恵器壺蓋である。口縁断面は三角形を呈す。206は黒耀石製のスクレイバーである。

S D 056 (付図) 出土遺物(第14図207・208)。土師环である。底部は回転糸切りである。

#### 6. 時期不明の遺構

S D 057 (付図) IV-1区に位置し南北に流れる。S D058に切られる。断面はV字を呈し、幅172cm、深さ74cmを測る。縄文土器とみられる土器が数点出土しているが、1点土器も出土している。

S D 058 (付図) S D057の西側に位置する。断面は逆台形を呈す。水が流れた形跡はみられない。素焼きの土器片が数点出土しているが時期は不明である。

S D 061 (付図) IV-1区中央に位置する。S D062に切られる。幅88cm、深さ21cmを測る。素焼きの土器片が数点出土しているが、時期は不明である。

S D 064 (付図) IV-1区西側に位置する。東西方向に流れ長さ17m、幅83cm、深さ19cmを測る。柱列と主軸が同じで切り合いがはっきりしない。同時期であると思われる。遺物は出土していない。

S D 068 (付図) IV-1区に位置する幅88cm、深さ74cmを測る。断面は逆台形を呈す。

#### 7. その他の遺構と遺物

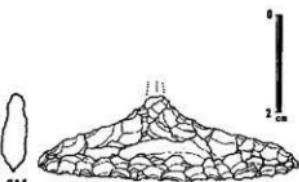
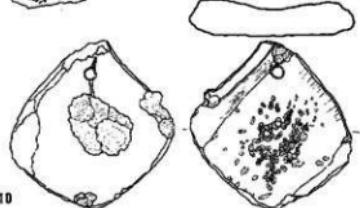
209はスタンプである。S P0003から出土した。滑石製石鍋の口縁部を再利用しており、内面にやつでの葉を彫り込んでいる。石鍋から切り取った面は磨いていたと思われる。欠損しており、元の大きさは不明である。210は滑石製品である。石鍋底部の再・再利用品であると思われる。1辺8.5cmのほぼ方形で四隅は粗く成形している。1角に径0.8cmの穴が穿孔してあるが、角の方向は擦れて抉れており、紐で垂らして使用している。中央部は削られている。温石と思われる。1辺に縁取りがみられる。再利用次の痕跡と思われるが、石硯の可能性もある。III区中央部で遺構検出時に出土した。

211は石匙である。基部が欠損している。

209



210



第15図 その他の遺物 (S=1/3・1/1)

## 8. 小 結

下水道工事に伴うトレンチ状の調査であるため、2次調査の確認にとどまった。各区分にまとめる  
と、I区・III区 2次調査で確認した古代～中世の大型据立柱建物や居館跡の南側の続きである。溝・  
上塙・ピット群を確認したほか、東側に溝に囲まれた区画を確認して、12世紀～14世紀初頭の居館跡  
がさらに東側に延びることを確認した。ふたつの区画の間には通路状の空間がみられる。

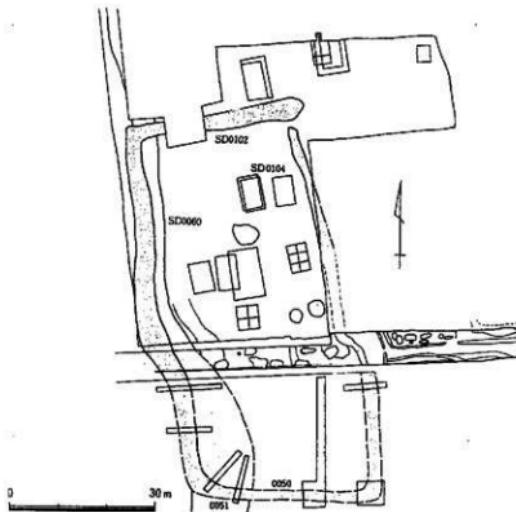
II区 遺構は極端に薄くなるため、1区東側のSD008が居館の東端と考えられる。地山は暗褐色の  
やや粘質を帯び、貞島川の流れにより、湿地状になっていた可能性がある。

IV-1区 遺構は薄くなる。南北方向の旧河川を数条検出したが、SD057のように断面V字型を呈  
し、人為的に掘られた溝もある。また、西端にはSD064と並列する10間(約15m)の柱列を確認した。

IV-2・3区 不整形の土坑を数基検出したが遺物は出土しなかった。地山は粗砂層や礫層で、室  
見川の氾濫域であったと思われる。

今回の調査成果としては、

- 1 居館周辺の東側の溝を2次・3次調査から予想された箇所で確認した。
- 2 東側に溝で区画された別の区画がある可能性が出てきた。
- 3 東端で西側のV字溝に匹敵する溝(SD008)らしきものが出土した。
- 4 SD046から人頭大の砾が多く出土し、周濠の西側にも石垣が築かれていた可能性が出てきた。  
などである。その他では西側で10間もの柱列とそれに沿う溝を確認したが、遺物が出土せず、時期は  
不明である。また2次調査では出土しなかった遺物も多くあり、SD001の漆椀、SK045の漆製品な  
ど土器以外の遺物も出土している。2次調査では古代から中世の遺構を①12世紀中頃②12世紀後半  
～14世紀初頭③14世紀初頭～前半と3期に区分したが、今回の調査では各遺構がどれに伴うかを明確  
にできなかった。今後の北東部の別区の調査により、居館の構造が明確になることが期待  
される。



第16図 環壕全体図(縮尺1:1000)

# 図 版





(1)II区全景（西から）

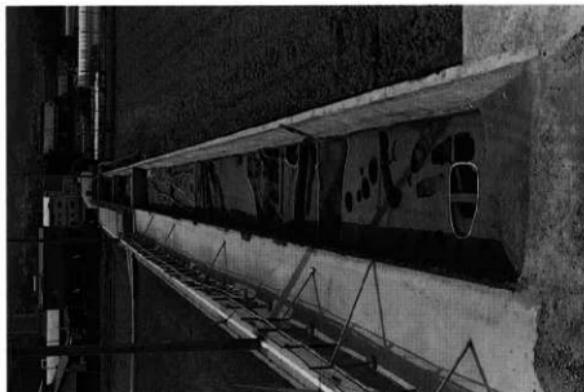


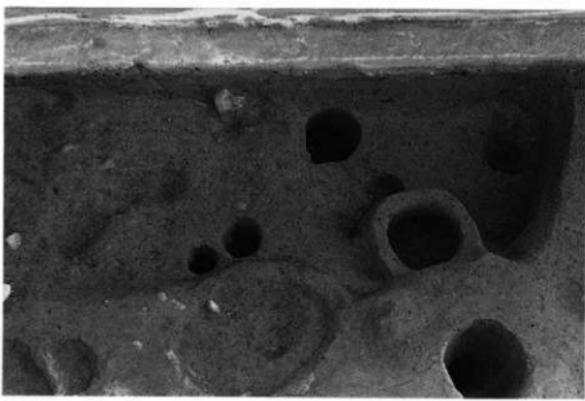
(2)I・III区全景（東から）



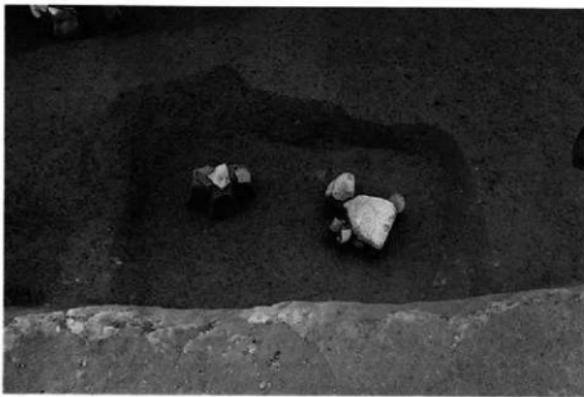
(3)III区全景（西から）

図版 2





(1) SK005 (北から)



(2) SK007 (北から)



(3) SK010 (北から)

図版 4



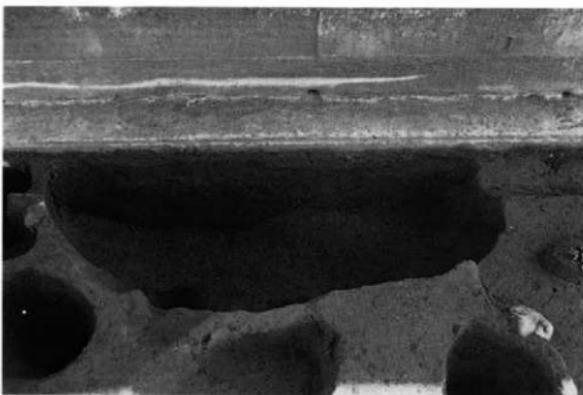
(1) S K014 (北から)



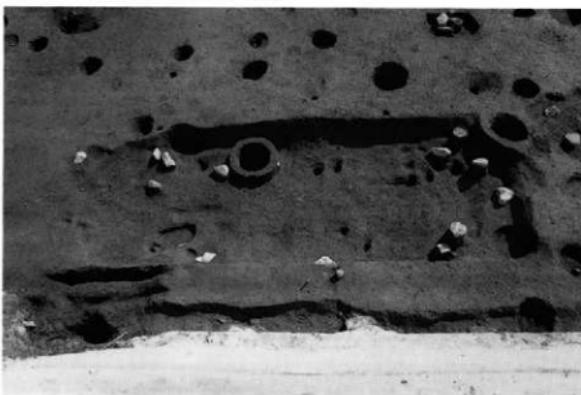
(2) S K014完掘 (北から)



(3) S K015 (北から)



(1) S K018 (北から)



(2) S K019 (北から)



(3) S K021 (南から)

図版 6



(1)SK025 (北から)



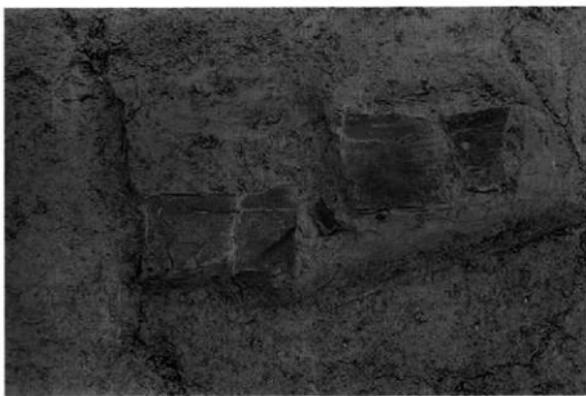
(2)SK026 (北から)



(3)SK034 (北東から)



(1) S K041土層（東から）



(2) S K041（出土漆製品）



(3) S K046（北から）

図版 8



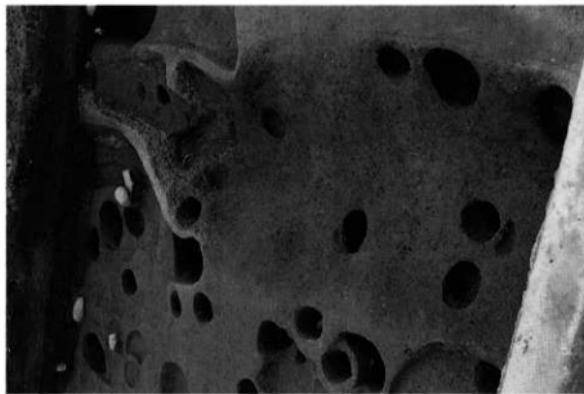
(1) S E 045 (北から)



(2) S D 008 土層 (西から)



(3) S D 008・009 (東から)



図版10



(1) S D037 (北から)



(2) S D046 (北から)



(3) S D055 (北から)

# 清末遺跡III

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書

508集

1997年(平成9年)3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 西日本新聞印刷

